



Title	会の歩み
Author(s)	木村, 慶; 雪永, 枝政; 長谷, 広 他
Citation	大阪公衆衛生. 1959, 4, p. 28-29
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/84734">https://hdl.handle.net/11094/84734</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 会の歩み

この頁では大阪における色の研修サークルや会の姿をとらえ全国の動きに及びたい。

## 大阪眼衛生協会

大阪眼衛生協会は昭和25年6月発足以来、眼の衛生思想の普及向上、ならびに眼疾患の予防、治療を目的として公衆衛生領域のたくましい活動を展開してきた。主な例を挙げると毎年全国的に実施される眼の愛護運動に関する諸行事の実施、養老院収容者に対する老眼鏡の贈呈、中学生（要援護家庭）に対する眼鏡贈呈、眼の屈折異常者に適正な眼鏡を提供するため「眼鏡士」の講習ならびに学術、技術検定試験の実施および同登録制度の活用等により眼鏡店の資質向上を計ってきた。昭和32年からは不幸な失明者に対する無料開眼手術なども加え関係者から大いに感謝されている。昭和33年5月3日には大阪府知事から衛生優良団体として宇山会長（国立大阪病院副院長、阪大名誉教授）が代表となって栄ある表彰を受けた。

## 公衆衛生の会

ながらく休んでいた例会を再開したのは、昨秋10月11日、九州の学会の直前であった。主題は「公衆衛生の会の今後の活動方針」ほとんど1年ぶりの例年であったのに、会場の阪大医学部来賓室に集ったのは、大阪、兵庫の保健所ドクター、保健婦を中心に20数名。3時間に余る討論が行われた。

数年前この会が生まれた当時にくらべ、大阪の公衆衛生運動には大きな変貌がみられる。現在われわれの果すべき役割は、以前より一歩進んだところに見出されねばなるまい。何ものにもとられる必要のないこの会の貴重な特長を生かすべきところはどこか。こういう問題提起にこたえて——現在活発になってきている協会その他の団体、組織の運動には、どうしても行政中心の立場がつきまとう。サービスを受ける住民の側に立つことが無意識的に弱められるし、職制の中で

の発言が多くなり、現在の衛生行政の理念や機構を根本的に考えなおしてみるというような広い立場に立つことにもおのずから制約が生まれる。これはわれわれの会のような組織でどうしても補ってゆかねばなるまい。とすれば、ここ1、2年来、地方自治体の公務員労働者としての自覚から進められてきている自治労の自治研究集会などにも眼を向け、そういう活動との提携をはかることは重要である、等々。積極的な意見が出され、ボランティアの会としてこの会を育ててゆくべき重要性があらためて確認された。

1月後、12月6日には「公衆衛生従事者の組織と活動」をテーマに例会がもたれた。欧州の視察から帰られた阪大関教授の話題提供とあって、出席者は60名、会場は満員の盛況であつた。英国における保健婦、インスペクターの制度、組織を中心に2時間にわたる詳細な報告の中からわれわれがつかみとつたもの——英国の公衆衛生従事者の組織がいかに自主性に富み、しかも強力なものであるか。研修もすべてそれらの組織で自主的に企画、実施されており、それがいかに高い水準のものであるかということ。とくに、そういう組織が職種別の労働組合と表裏一体の関係にあり、自らの地位の向上をめざす運動と、公衆衛生活動を改善、進歩させようとする運動とが一つに結びついているという事実。——すべて、わが国の公衆衛生運動の進め方と真剣に取り組もうとしているわれわれにとつて大きな示唆を与えるものであつた。

このように、公衆衛生の会は、新しい情勢の中で目標をさらに明らかにして、再び活気にみちた活動を展開しようとしている。いろいろな分野で同じ志にもえておられる方々の参加を求めてやまない。

（大阪公衆衛生の会 木村 慶）

## 社団法人大阪府看護連合会

本会は昭和29年大阪看護協会として発足し昭和33年大阪府看護連合会と名称を改称いたしました。会の目的はいうまでもなく、府下在住の保健婦、助産婦、看護婦相互の親睦と向上を図り、また府民の保健衛生の向上に協力することにあります。これは他府県に見られない独自の会であります。

すなわち下記のような組織になっております。

日本看護協会 — 保健婦会大阪府支部  
— 助産婦会 “  
— 看護婦会 “  
日本助産婦会大阪府支部

この四団体を以て組織したものが大阪府看護連合会です、現在会員数6,000余を持っております。

（会長 雪永枝政）

## 大阪市保健所医師会

さる4月22日午後2時より田辺製菓の5階ホールにおいて大阪市保健指導研究会と最初の合同研究会をもったので報告する。

研究会の内容を略記すると次の如くである。すなわち、クリニックのあり方、家庭訪問、チームワーク等についてのアンケートを、予め保健婦 医師全員に配布してその解答を求めておき、その結果を発表したあと、主としてクリニックのあり方についてさらに突込んだ討論を行った。取り上げた問題点は最もありふれたものではあったが保健婦、医師合せて約200名が一堂に会して熱心に討論を行い、お互に理解を深め、励まし合い、協力し合うという一家団結的なその場の雰囲気こそ誠に貴重なものであって、大成功であった。  
(長谷 広)

## 医療活動研究会

日夜多忙な診療業務に従事しながらも、現状にあきたらず、さらによりよい診療を行うための方法を求めようと、数人の医師や看護婦の有志が中心となり、これに、ケースワーカーや保健婦が加わって、新しい研究グループ「医療活動研究会」が発足した。

医療活動とは、耳なれぬ言葉かも知れない。あえてこのような表現を用いたのは、次のように考えたからである。すなわち、従来、医療はともすれば、医師と看護婦とだけで行ないうる、狭い意味での診療行為とのみ考えられすぎて来たのではなからうか。現実の社会で複雑な条件のもとに生活している人間として、病人を捉えたならば、医療は医師と看護婦だけで全うし得るものではなく、関連諸分野の人々の十分なチームワークのもとでこそ全うできるであろう。医療の実践におけるこの総合的な活動を評価し強調したかったのである。

したがって、会員も前述の人々以外に事務員、助産婦、栄養士（炊事従事者）、薬剤師、検査技術員等広汎な分野の人達で、日常業務の中から出て来た問題点を持ちよって、色々な角度から検討している。

例会を3回重ねた所で、まだやっと緒についたばかりだが、今後2ヶ月毎に例会を開く予定である。この方面に関心を抱く諸兄弟の参加をのぞんでやまない。  
(阪大衛生 藤森 弘)

## 大阪市保健指導研究会

一番身近かな保健所医師との相互の理解を深め、より能率的な動きをしたいという会員の希望で4月22日に懇談会をもった。その時の話題のよりどころを掴む

ため3月上旬に保健所医師会とともに同じ問題のアンケートを作り医師、保健婦別に集計した。その結果では両者ともクリニックに関するあり方についての意見が多く懇談会の話題も自らそれになった。特に乳児では来所者が多く十分な指導ができない上、終了がおそくなるので午後の計画が思うようにできない。約束のクリニック集団指導をまじえた全体的な年間計画の提案等、来所者がかたよることなく合理的で保健婦にも興味ある方法に、もってゆこうとする機運があった。その他種々の発言があり時間的な関係で充分いつくせない点もあったが、とにかく一緒に会合をもったということに非常に意味があった。(会長 石田 吉子)

## 保健婦の歴史を勉強する会

保健婦がどのような経路をたどって現在に至ったかは誰でも興味をもつ所であろうが、新しい理念のもとにパイオニアとしての諸先輩が、自ら切り開かれ、独自の歩みを続けていた頃の大阪に於ける保健婦活動については、保健婦達の間ですら、殆ど知られていない有様である。一度過去をふりかえり、これら先輩がどのような様子を、どの様に歩いて来たかを知りたいというのが、大阪に育った保健婦達の数年前からの声であった。

本年五月末、偶然にそうした保健婦達の集りで話題になり、自分達で歴史を勉強しようとの皆の意向で、この会が誕生した。誰からとなく呼びかけてみた結果5月30日の第1回の集りには約十名の保健婦が集った。この集りでは、歴史というものを何故勉強するかという点に話題の中心がおかれ、御出席下さった丸山教授（阪大）を囲んで、討議された。現状打開の一策としても、現在の保健婦活動の問題点を念頭におきながら今一度歴史を省ることの意味は大きいであろう。

第2回の会合は6月6日に開かれたが、この時集ったのは約20名である。具体的にどのような方法で歴史を勉強するか、また本年度にはどの辺まで進むべきかなどを話し合った。集った保健婦は、大阪市、大阪府、兵庫県などの保健所保健婦が多いが、歴史をたどってみることに多少とも興味のある保健婦ならば大いに歓迎している。例会での皆の意見は、その都度まとめ、小冊子として残す予定である。

(阪大公衆衛生 大國美智子)

---

(各団体からの通信や、機関誌紙、記録などの交換をのぞみます。——編集部)